

父親像に父とのスポーツ経験が及ぼす影響について

スポーツマーケティングゼミナール 1315034 関 和哉

1. 研究動機・研究目的

現在、日本では、イクメンという言葉が出現し、父親の育児・家事参画への意識が徐々に芽生え始めてきていると考えられる。しかし、日本の父親の育児や家事への意識は世界各国の中でも極めて低いと指摘されている(船橋, 2007; 内閣府, 2016)。この背景には、モデルとなる父親像が子どもの前に存在せず、父親像のモデルが不在であることなどを尾形(2018)は指摘する。父親像が不在とされる我が国では、次世代に父親になっていく若者はどのようにして父親像を形成しているのだろうか。

父親像の形成に関して川崎・神田・川口(2001)は同一視という視点から父親の自己への関わりは、理想とする父親イメージ形成に影響を及ぼすことを明らかにした。また、父親の影響力に関しては、海老原・横山・宮下(1989)がスポーツ的社会化という視点から、男子と女子共に母親よりも父親の方がスポーツ参加への影響力が強いことを明らかにした。そのため、過去の父親とのスポーツ経験が父親像形成に影響を及ぼすことが考えられる。

現在、父親像のモデルが不在であり、父親像形成の要因についての研究は散見されるが、過去の父親とのスポーツ経験が父親像形成の要因になるという研究は見受けられない。そこで、本研究では、スポーツ系学部の大学生の抱えている「求める父親像」を明らかにし、過去の父親とのスポーツ経験の関係を明らかにする。

2. 研究方法

本調査は、A大学のスポーツ系学部の大学生を対象に調査を実施した。調査方法は、質問紙を直接配布・直接回収とした。総配布数は、114部、回答率は、100%であった。

質問紙は、個人的属性、競技歴、父親との関わりの頻度、スポーツを通じた関わり、あなたの求める父親像の5つを設定した。あなたの求める父親像については尾形(2018)の父親像に関する項目44項目を採用し、4段階のリッカートスケールを用いた。

分析方法については、すべての項目について単純集計を行い、全体の傾向を把握した。属性に関してはクロス集計を行い、サンプルの属性を把握した。「あなたの求める父親像」に関する分析の手続きは、尾形(2018)に倣い、質問項目から構造化を図るために因子分析(主因子分析, プロマックス回転)を実施した。サンプルの父親像を類型化するために因子分析の結果から因子得点をz得点に換算し、階層的クラスタ分析(Ward法, ユークリッド平方距離)を行った。また、性別、世帯の就労形態、父と離れた生活、父との関わりの頻度、スポーツを通じた関わりと類型化された父親像のクロス集計を行った。性別、世帯の就労形態、父と離れた生活、スポーツを通じた関わりについては類型化された父親像とカイ2乗検定を行った。また、父との関わりの頻度については類型化された父親像と一元配置分析を行った。

3. 主な結果と考察

求める父親像の項目を因子分析し、「家族をまとめる役割」「子どもの社会の適用のしつけ」「家事」「妻とのコミュニケーション」「子どもとのコミュニケーション」「子どものわがままに対するしつけ」「育児」「家庭よりも仕事」「仕事よりも育児」の9因子が抽出された。

因子分析の結果からクラスタ分析を行い、「家庭高関与・育児家事高関連型」「仕事優先・家庭関与型」「家庭育児優先・家庭育児低関与型」に類型化した。一般大学生の仕事を優先する父親像は家庭への関わり、妻や子どもとのコミュニケーションが低い傾向があった。一方で、スポーツ系学部の大学生が抱く仕事を優先する父親像は、家族をまとめる役割(0.253)や妻(0.254)や子どもとのコミュニケーション(0.290)の項目において因子得点が平均以上の値だった。このことから、スポーツ系学部の大学生において、仕事優先の父親像を抱く場合、家族との関わりを持ち、妻や子どもとのコミュニケーションを大切にする傾向があると推察される。

父親像とスポーツを通じた関わりとの分散分析をした結果、有意差は見られなかった。しかし、仕事優先・家庭関与型を抱くサンプルは、スポーツを通じた関わりとの平均値は3.22と最も高い値であった。このことから、父親像形成過程において仕事優先の父親像の場合、スポーツを通じた関わりが家庭への関与も必要だとする父親像を抱くことに影響を与えることが推察される。つまり、父とのスポーツ経験によって父親像は異なる可能性が示唆された。

表1. スポーツを通じた関わりと父親像の分散分析

項目	家庭高関与・ 育児家事高関連型	仕事優先・ 家庭関与型	家庭育児優先・ 家庭育児低関与型
	平均値	平均値	平均値
スポーツを通じた関わり	3.14	3.22	2.93

4. 結論

スポーツを通じた関わりは、仕事優先の父親像を抱く場合、家庭への関与を促進する要因になると言える。そのため、父親の役割が注目される日本で、積極的に家庭への関与を望む父親を増加させるためにスポーツが有効な手段となると考えられる。具体的には、子どもと父のスポーツ活動を増やすために、生涯スポーツイベントやプロスポーツ観戦のイベントなどにおいて親子で参加できるプログラムを開発し、参加を促すことが有効な手段になると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、分析や調査方法など私の力不足により、周りの方々にご迷惑をかけてしまい、大変反省しております。しかし、工藤先生を始め、多くの方が助言を下さり、無事に卒業論文を執筆し終えました。本当にありがとうございました。

主な引用参考文献

尾形和男(2018) 「男子大学生の抱く父親像形成に関する基礎的研究－父子関係・夫婦関係の視点から－」 愛知教育大学研究報告教育科学編 67巻(2018), 1号, 229-237